

風土記の丘の花だより³¹⁸

今、そしてこれから見られる植物(2026年4月25日)

風土記の丘ではサクラが終わり、次はフジやツツジがきれいに咲いています。フジにはクマバチの仲間が、ツツジにはアゲハチョウの仲間がたくさん集まってきて、さかんに蜜を吸っています。春をとおりこして、初夏を感じる季節になってきました。



万葉植物園の中程にエンコウソウの黄色い花が咲いています。キンポウゲ科の花で、水辺が好きな植物ですが、自生地は少なく限られています。この株ももちろん植栽されたものです。エンコウとは「猿猴」のことで、茎を延ばして生え広がるさまを、テナガザルの手足にたとえた名前だそうです。花びらのように見えているのは、萼にあたる部分です。

いつどなたが植えてくださったものかわかりませんが、このように貴重な植物を残す事はいいことだと思います。



ギンランが開花しました。里山を代表する野生ランですが、風土記では年々少なくなっていて、今年はまだ、一株しか確認できていません。こんなことは考えたくはありませんが、こんな可愛い野草ですから、ついつい持ち帰りたくなるのでしょうか。大切に見守ろうとする多くの人がいる一方で、独り占めしようとするごく一部の人がいるから、鑑賞価値のある野草はどんどん減ってきています。「手にとるなやほり野にお置け なんとやら・・・」ですね。



だれが言ったか「なんじゃもんじゃの木」、本名ヒトツバタゴの白い花が万葉植物園で咲いています。まだ幼木で1メートル余りの木です。これをご覧になる頃まで咲いていてくれるといいのですが・・・。特徴的できれいなのに、名前が分からず、よく落語に出てくるご隠居さんみたいな人が、テキトーにこんな名前と呼んだのでしょうか。ですから、他にもいくつかのなんじゃもんじゃの木というのがあります。話題性があるので、よく新聞やテレビのニュースのネタにされます。



薄い水色の2ミリほどの小さな花がいっぱい咲いているのはハナイバナです。意識しなければじっくり見ることはないでしょうね。歩いていると、気にも留めないただの雑草にすぎません。でも、詳しく観察するとハナイバナという名前の意味がよく分かります。漢字で書くと「葉内花」、葉の内側に小さな花が咲くので「葉内花」なのです。同じ仲間ムラサキ科のキュウリグサとよく似ていて、植物観察の初心者の方はよく混同されます。慣れてくるとすぐに区別できます。この草に限らず、なんでもじっくり観察すると面白いものです。

松下